戸塚　仁

東京都

臓器移植者（レシピエント）の移植臓器の長期生着には生活習慣病を予防することが重要である。食事内容の見直しだけでなく、運動も必要なことが日本移植学会により報告されている。

戸塚さんは、29歳で生体腎移植を受けて元気になったことで、日本におけるレシピエントの日常生活の中にスポーツを取り入れるため企画、運営、などの啓発活動や就労支援相談等を行っている。中でも、毎年開催するレシピエントのオリンピックである全国移植者スポーツ大会の企画、運営・実施や世界移植者スポーツ大会連盟（WTGF：World Transplant Games Federation）が主催する世界移植者スポーツ大会への参加、選手の派遣等を行っており、これらの活動が評価され2016年にWTGFが主導するレシピエントの生活に運動を取り込むことを推奨するプログラムである「fit for life」のアンバサダーに選出された。戸塚さんは選手としても世界大会の短距離100m、200mで金メダルを取っている。その他「移植DE散歩」、「ありがとうの日」の企画等、SNS、ブログ等で情報や移植啓発を発信し広く認知してもらうための活動を続けている。

（推薦者：谷川　基務）

私は1998年4月15日に母から腎臓の提供を受けました。その時にこのような素晴らしい医療を受けたのだから、次に続く人のサポートがしたいと考えていました。腎臓移植後に初めて参加した2000年の全国移植者スポーツ大会、翌年兵庫県神戸市で行われた世界移植者スポーツ大会やイベントに参加することにより仲間ができ、NPO日本移植者協議会が企画するランニング教室やロードレース等のメンバーとして声をかけていただくようになりました。元々NPO日本移植者協議会ではスポーツによる臓器移植医療の啓発活動を行なっていたため、私には参加しやすい環境でした。その後、NPO日本移植者スポーツ協会で全国移植者スポーツ大会の運営や世界移植者スポーツ大会の選手派遣、グリーンリボンランニングフェスティバルの調整を任されるようになり微力ながら日本の移植医療の推進に協力してきました。

私に転機が訪れたのが2016年、世界移植者スポーツ連盟が主催するfit for lifeの初代アンバサダー13人のうちの1人に選任されました。fit for lifeは‘More Transplant Recipients, More Active, More Often’というスローガンに基づき、スポーツによる臓器移植からの早期回復、スポーツによる健康維持・向上を目的として各国のアンバサダーが活動を行っております。

私と仲間が実施している日本でのfit for life活動は、移植医療を知っていただく活動として、毎月10日を「ありがとうの日」として、臓器移植者（レシピエント）から臓器提供者（ドナー）に向けて「ありがとう」のメッセージのボードを持ったレシピエントとの写真とメッセージを、ブログ・SNSを通じて発信しております。これま

でに41名のレシピエントに協力をいただいています。また、レシピエントの体力維持、向上を目的として「移植 DE 散歩」というウォーキング企画を実施しています。アプリを利用して設定されたコースのチェックポイントを歩きながら、楽しみながらコースの完歩を目指す企画です。主に関東と関西地域で計10回実施しており、こちらもブログ・SNS で発信しております。この fit for life 活動については第51回臨床腎移植学会や第54回日本移植学会総会で発表する機会にも恵まれました。

そして、この度はこのような大変名誉ある賞をいただき、感謝申し上げます。この賞は NPO 日本移植者協議会、NPO 日本移植者スポーツ協会そして私の企画にご協力いただいた方のサポートにより受賞出来たものです。この場をお借りして御礼申し上げます。この賞を今後の励みとし、臓器移植医療の啓発活動に励みたいと思います。

▲ありがとうの日

▲移植 DE 散歩 明石

▲世界移植者スポーツ大会 4×100m リレー

▲世界移植者スポーツ大会 日本チーム

▲全国移植者スポーツ大会での競走

▲Fit for Life アンバサダー一同 シカゴにて

一般社団法人パーソナルサポートセンター

代表理事
新里　宏二

宮城県

ホームレス、障がい者、DV 被害者やニート、引きこもり、若年性認知症などで就労が困難な人たちを対象に、仕事、生活、住まいを「寄り添い伴走型」で支えようと2011年に宮城県仙台市で設立した。その直後に東日本大震災が発生したため、生活困窮者を支援するノウハウを被災者支援にも活用することにした。

そこで仙台市と協働で避難所から仮設住宅へ移る被災者の安心見守り事業を行った。仮設住宅入居者の孤独死、自殺の防止を目的とし、仮設住宅で入居者が安心、安全、そして少しでも快適な生活を過ごせるように、住み慣れた地域を離れた被災者に対し、新たなコミュニティの形成や高齢者、女性などの入居者へのサポートを行い、プレハブ仮設住宅の全戸訪問を実施した。被災者支援を行う一方、設立時に掲げた対象者への支援や、経済的困窮者への生活支援や就職支援にも力を入れ、今後は一人ではなかなか生活していけない人たちが共同生活をしながら支え合い、自立していけるような場所も作っていきたいと考えている。

（推薦者：特定非営利活動法人ワンファミリー仙台）

パーソナルサポートセンターは、ホームレス･障がい者･DV 被害者･ひとり親世帯･ニート・ひきこもり・就労困難者などの社会的困窮状態にある方、高齢者及び若年性認知症等、就労が困難な方に対して、仕事・生活・住まいを寄り添い伴走型で支えることを目的に2011年３月３日に設立した団体です。その後、設立７日後に東日本大震災が発生、津波・地震により生活の基盤を失った被災者に生活困窮者支援をするパーソナルサポートの仕組みは、活用可能ではないかということで、仙台市と協働で安心見守り協働事業を実施しました。具体的には、仮設住宅に職員が一日中滞在し、入居者の個別訪問を行い関係団体や、行政と連携しながら各入居者の見守りをしてきました。この被災者支援は2017年10月の仮設住宅閉鎖、入居者全員の引越し先が見つかるまで続けられました。その後、この被災者支援のノウハウを活かし、2016年４月に起きた熊本地震の支援や、2018年７月に起きた岡山倉敷の豪雨災害においても、日本財団の助成のもと被災者支援を実施してきました。

また、同時に2015年４月より、生活困窮者自立支援制度の施行にともない、仙台市･宮城県（南部圏域）･多賀城市から委託を受けて、生活困窮者の生活支援・就労支援・就労準備支援を実施し、現在は、仙台市・宮城県（南部圏域・北部圏域）多賀城市・富谷市の方々の困窮者支援を実施しております。

今回、特定非営利活動法人ワンファミリー仙台の推薦を受け、公益財団法人社会貢献支援財団より表彰されたことは、弊法人が設立から８年９ヶ月の短い業歴の中で、大きな節目でもあり、今後も事業を継続していくうえで、役職員ひとり一人の自信にも繋がっております。

表彰式の当日は、多数の表彰された個人・団体と接することができ、大変光栄に思

います。これを機に、多くの社会的困窮状態の方々の支援に努めて参りますので、今後も多くの支援を賜りますようお願い申し上げます。

ありがとうございました。

代表理事　新里　宏二

▲避難所での見守り（熊本地震）

▲連携会議の様子（西日本豪雨）

▲仮設住宅見守り（東日本大震災）

▲宮城県被災者転居支援センター

▲出張相談会（わんすてっぷ）

▲相談会の様子（熊本地震）

特定非営利活動法人サポートステーション輪

東京都

法人設立は2015年だが、事業の１つである「ひよこ教室」（教室）は1974年に始まり40年を超える歴史がある。障がい児の親が保育士の資格をとり、豊島区の個人の家を借りて教室は始められた。その後、新宿区の教会そして現在は文京区の東京聖テモテ教会に移った。当初より教室は、障がいのある子どもと健常の子どもが同じ空間、同じ時間を障がいの有無で分けることなく共に過ごし、遊びや行事を通してすべての子どもの成長を見守る統合保育を信条に行われている。２歳前後から４歳までの保育園や幼稚園への前段階の幼児14名が保育者８名とボランティア３名により、全国的にも珍しい障がい児と健常児のふれあいを大切にした、集団生活が楽しめるように保育をしている。

（推薦者：相川　美奈子）

理事長
相川　洋子

この度は、相川美奈子様からのご推薦を受け、このような素晴らしい賞を頂き、スタッフ一同、大変光栄に思っております。祝賀会には、前代表、スタッフと共に参加させていただき、喜びを分かち合えたことも大変有難く思います。また共に受賞された皆さんの活動の素晴らしさを知ることもでき、とても有意義な式典でした。今後の私たちの活動の広がりに繋がるような力をいただきました。心から感謝申し上げます。

私たちの事業の柱となっているひよこ教室は、障がい児の幼稚園や保育園への受け入れが難しかった45年前に、そのことに心を痛めた前代表（中野照子）が入園前の母子分離、身辺自立の訓練の場として創設した未就園児のための保育の場です。

設立当時は、障がいを持ったお子さんのみでしたが、その後、近隣の健常のお子さんが加わり、障がい児を中心に受け入れる統合保育となりました。近年は療育が進み、障がい児の幼稚園や保育園への受け入れが良くなり、同時に健常のお子さんをお持ちの親御さんも教室に興味を持ってくださる方が増え、受け入れ状況も変化してきました。保育方法は、障がいのあるなしに関係ありません。毎回、保育者の数を多く設定しているので、初めての母子分離も無理なく、その子に合わせたペースで進めています。

卒園生の中には、中学生での職業体験、大学生になって保育実習、イベントのボランティアなどに来て下さる方も出てきました。幼いころに一緒に過ごした思い出は、それぞれの心の中に少しずつ残り、その後、成長する過程で障がいに対して偏見を持つ事がないようです。大学の教授の紹介などで実習に来られた外部の学生さんは皆さん、最初は子どもたちにどのように接したらよいのか、障がいのある子と健常の子との関わり方の違いを心配しますが、一日共に過ごすだけで、それが全く無用の心配であったことに気づいてくださいます。

ひよこ教室がこうして長く続けてこられたのは、現在、お子さんを通わせてくださっている保護者の皆さまはもちろんのこと、NPO 設立後も毎年ご協賛くださる卒園生保護者の皆さん、関係者の皆さま、そして少ない手当にも関わらず、一生懸命に教室のこと、子どもたちのことを考えて日々、保育に携わってくれるスタッフのお陰です。

最後になりましたが、貴財団の素晴らしい事業のご発展を心よりお祈り申し上げるとともに、これからもいろいろな方々に希望を届けていただきたいと願います。

有難うございました。

理事長　相川　洋子

▲入園おめでとう！

▲これは楽しそう！

▲手がたでお絵かき

▲ブロック遊び

▲お外でも遊びます

▲卒園式

静岡県サルコ友の会

会　長
神谷　京子

静岡県

2003年にサルコイドーシス（原因不明の全身性（多臓器性）肉芽腫性疾患の特定疾患）を発症した神谷京子さんが、治療法も確立されておらず、病気に関する情報が少ないため、東京で行われた医療講演会への参加をきっかけに静岡でも常設の情報交換の場を作ろうと、保健所や行政、難病団体連絡協議会の協力を得て2009年10月に難病患者団体「静岡県サルコ友の会」を設立した。

県内の患者数は約500名だが、現在の会員は50名程。病気を明らかにしたくないという人も多く、入会数は減少している。会の運営は、会費と企業等からの助成金によって賄っている。神谷さん自身、入院や通院を繰り返しながらも、中心となって年１回の患者交流会と医療講演会を開催するほか、同じ病気を抱えた患者同士が集い、相談があればいつでも悩みを共有して助け合いながら活動している。また、病気を知らない人たちにもサルコイドーシスだけでなく、「難病患者」への理解を深めてもらうための活動も行っている。

（推薦者：NPO 法人静岡県難病団体連絡協議会）

この度は、第53回社会貢献者表彰を静岡県サルコ友の会としていただき、ありがとうございました。発足から10年にわたる地道な活動を評価していただいたことと会員一同、感謝でいっぱいです。

華やかなホテルでの表彰式は、田舎者の私にとって驚くことばかりで感激でした。足の具合が悪く車イスでの移動となりましたが、スタッフの方々が親切に対応してくださり、ありがとうございました。全国から選ばれた個人・団体の方々の活動報告は大変勉強になりました。今後、私たちの活動の参考にさせていただきたく存じます。

私たちの会は、サルコイドーシスという難病患者の集まりです。同じ難病を抱えた者同士が集い、情報交換をしながら、病気のことをより深く知り、お互いに支え合うことを目標にしています。そのために、専門の先生を招いた医療講演会、患者同士の交流会を行っております。

私もこの受賞を励みに、体の続く限り会員の皆様と共に、サルコイドーシスという難病を世間の方々に認知していただくように頑張っていく所存です。

今後も、私たちと同様に難病で苦しんでいる難病の方々や、サポートして下さっている団体に日が当たるように、ご協力していただきたいと存じます。

会長　神谷　京子

▲講演を聞く患者

▲サルコ主催の作品展

▲サルコ主催の組紐教室

▲サルコ主催の組紐教室

▲国会請願書街頭署名活動

▲共生週間（RDD 参加）

▲医療講演会

▲医療講演会（女子医大の土谷教授）

更生保護法人草牟田寮

理事長
深野木　信

鹿児島県

1899年に設立された同施設は今年で121年目を迎えた。刑務所を出所した人たちの中で、自立するための資金がない人や身寄りや住居がなく、自立困難な状況の人たちが平均２～３ヶ月、ここから仕事に行くなどして資金を貯め、生活に必要な知識を身に付け社会復帰の準備を行う。

社会生活技能訓練では、再犯の大きな原因となる金銭管理についての講習を行い、借金や連帯保証人を頼まれた際の上手な断り方等、再犯にならないように生活をしていけるスキルも具体的に提示している。依存症から脱却するための講習会では、一般人の参加も可能になっている。また、出所者の高齢化や障がい者への受入れに対応し、療育手帳等、各種障がい者手帳の取得や介護保険サービスの適用、成年後見制度の利用、生活保護や障がい年金の申請や手続きを行う支援もしている。このような活動を通じて、善良な社会人になるための援助を行っている。

（推薦者：更生保護法人全国更生保護法人連盟／更生保護法人両全会）

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団から表彰されるという栄誉を賜り、当寮職員一同、大変喜んでいます。

今回の受賞は、我々職員のみならず、明治32年６月に当寮が創建されて以降、尽力されてきた諸先輩職員に与えられたものと考え、可能な限り連絡して共に喜びを分かち合っているところです。

表彰式典に際しまして､私たち４人を会場の「帝国ホテル東京」に宿泊させてもらった上、表彰状及び副賞をいただき、本当に感謝しております。表彰状は草牟田寮の応接室に掲げ、副賞はこれから皆で話し合い、有効に活用させていただく所存です。

さらに、今回受賞された各団体・個人の功績を前日夜の懇談会及び表彰式典で聞くことができ、その企画力・実行力に深い感銘を受けました。

海外で恵まれない子どもたちに手を差し伸べている方々、１日も休むことなく不安や悩みを抱えている若者の話を電話で聞き、相談相手になることで彼らの命を救っている方々、東日本大震災により被災者となられた高齢者、女性たちに物心両面で支援の手を差し伸べ、孤独死、自殺の防止に尽力されている方など、いろいろな形で支援されている事例を知ることができて、自分の心が洗われる感動を覚えました。

私たちも、今後も社会から見放された刑務所出所者等をできるだけ多く寮に受け入れ、彼らの抱えている問題解決のために共に努め、一人でも多くの再犯者を減らすことができるように日々精励努力する所存です。

終わりに貴財団のますますのご発展を祈念します｡どうもありがとうございました。

施設長　田之頭　一美

▲年末クリスマス会で寮生にプレゼントを渡す

▲年末恒例のもちつき大会

▲寮生の旅立ち（退所風景）

▲元寮生の訪問を受けて相談に応じている風景

▲青年司法書士のみなさんによる法律相談会

▲全体集会における元寮生の卓話

北浦　茂

岐阜県

様々な事情から不登校になった子どもたちを問題児として捉えるのではなく、大切な存在として個々の特性に合わせた教育が必要と考え、岐阜県内で13年間に亘りボランティアで不登校児童や生徒・親の支援を行っていた。その後、宿泊型フリースクールやNPOとして支援を続け、2008年に岐阜県内の廃校となった小中学校校舎を借り受けて学校法人「西濃学園中学校」を開校。不登校のための技能連携高校の教育を始めた。

この種の学校で寄宿制の正規の学校は全国でも数少ない。大自然の中で愛情あふれる教師や臨床心理士の指導のもと、学習の遅れや喜びを取り戻しながら、地域の清掃や草刈り、植樹などの環境ボランティアを活発に行い、祭りや運動会などを地域と共同開催するなど、多くの場面で地域住民と交流している。こうした交流により、子どもたちが人間関係の構築や共同・公共の意識を学ぶ一方で、高齢化と人口減少の進む地域にも若者の息吹を吹き込み共存し、互いに助け合うことで村づくりや人づくりを行っている。

（推薦者：岐礼さくら会）

名誉な社会貢献者表彰を受賞することができ身に余る光栄です。厳かな式で身が引き締まる思いで安倍昭恵会長から表彰状を受け取りました。このハレの日を迎えるにあたって多くの方のお世話になりました。特に妻には54歳での高校教師の退職後を支えてきてくれたことに深く感謝しております。

私が最初に教師になろうと思ったのは、小学校６年生の時でした。その頃の私は勉強嫌いで、毎日のように居残りをさせられていました。ある日、担任から「明日は竹とんぼを作るから切り出しナイフを持ってくるように」と言われました。工作が大好きだった私は、翌朝ウキウキして登校しました。１時間目の算数の時間には、先日のプリントが返され、プリント直しが命じられました。私は懸命に取り組むものの２時間目になり、先生は冷酷にも「出来ない人は続けてしなさい」と宣告されました。３時間目の図工の時間になっても、終わらない私には、竹とんぼの材料は渡されず、ぼんやりと皆の竹とんぼ作りを見ていました。この時、私は図工の時間には図工を行う先生になりたいと思ったものです。

中学に入学して、家庭教師の先生をつけてもらいました。その先生は勉強のほかにも、映画や哲学、スポーツのことなど、いろいろな話しをして下さいました。一挙に私の世界が広がり、急に大人になったような気がして成績も向上しました。その先生は教師の職業に関心を持っておられ、よく斎藤喜博先生のことを話され、「可能性に生きる」という本をプレゼントしてくださいました。それを読んで私もこのような教師になりたいと思いました。

高校教師になり、不登校を主張する生徒と出会い、情熱だけの指導では悪化することがあり、臨床心理学の知見が必要と考え、新しい学校創りの夢を描きました。故遠

藤豊吉先生（教育評論家）は「人が真剣に、事を始めようとすると、その志に惜しみない拍手をおくる人、実現不可能とはっきり予言する人、あたかもドン・キホーテの如き行為と冷ややかに笑う人、壮大なロマンを眼前にした時、人が見せる反応のすべてです。」と言われながら私は高い山を目指しました。

一教員の私にとっては山また山の連続でした。困難に遭遇した時、常にプラス思考を心がけ、誠実に一生懸命に歩み続けることで先が見えてきて学園創立に辿り着きました。

最後に私を温かく育てていただいた皆様に心より感謝いたし、この受賞を一つの通過点として、子どもたちの「無限の可能性」を信じ、歩み続けていきたいと覚悟を新たにしております。

▲2019.6月　瀬音運動会（久瀬校）

▲2019.8月　夏山登山（集合写真）

▲2019.8月　夏山登山（上高地にて）

▲2019.8月　少年の主張（県大会）

▲2018.12月　揖斐川町ソフトバレーボール大会

▲2019.4月　入学式

八木　俊實

鳥取県

勤務していた会社が鳥取市内の精神科病院の「通院患者リハビリテーション事業」を受託していたことから、八木さんは担当者として病院で入院加療中の人や退院患者との関わりが始まった。病院に出入りしながら、ちょっとしたことで傷ついたりストレスを抱えてしまう患者さんたちへの理解を深め、そうした精神障がいのある方々の社会復帰について真摯に考えて相談にのったり、勤務する会社の職員教育にも取り組むなどしていた。

退職後、画家として個展や絵画教室を開く一方で、2003年から鳥取市の渡辺病院が精神科の作業療法の一環として始めた絵画クラブの講師として、週１回、15年以上に亘ってボランティアで入院患者の絵画指導を行っている。また、鳥取市が運営する身体・知的障がい者のサロン「さわやかサロン」でも2004年から現在まで同様に絵画講師を務め、常に優しく相手を引き立て、上手下手ではなく、心の内を絵で表現することや描くことの楽しさを知ってもらい、病状の安定に繋がるよう願って接している。

精神障がい者のみならず、市内の小学校などでも出前の絵画講座を開き、課外へ出てなるべく実際の風景や被写体を目の前にして描くようにしている。なにより心も一緒に育てていってくれることを願って指導している。

（推薦者：日本精神科病院協会　鳥取県支部　支部長　渡辺　憲）

このたび、第53回社会貢献者表彰という栄誉ある賞をいただきました。長年、世間には見えない私のしてきた目立たない行為に、スポットライトを当てていただき、光輝くステージへと導きだされました。

これまでも多くの方々を表彰され、社会貢献支援をされた財団はもちろん、今回、私を推薦していただいた方、選んでいただいた選考委員の方々に対し、誠にありがたく心より御礼申し上げます。

東京の帝国ホテル孔雀の間という、華やかな会場でのすばらしい表彰式と祝賀会は、この齢になっても初めて味わうものでした。久しぶりに上京した私の心に奥深くしっかりと刻まれました。

振り返れば、幼少の頃から好きだった絵画、30歳から描きだした油絵が、趣味の枠を乗り越え独学ながら描いてきたことで、65歳で会社を退職した直後、絵画指導者への道へとつながり、その後は精一杯努力してまいりました。同じ頃、鳥取市の精神科病院で作業療法の一環としての絵画クラブの指導講師を引き受けて現在まで続いております。また、鳥取市の中央保健センター「さわやかサロン」でも、在宅で障害のある方々を絵画講師として支え接しています。10年間続けている小学生児童たちへの出前講座も大切だと思っております。少しでも世の中に役立ち、社会に役に立つ人間にという思いは、私の生き甲斐であり喜びでもあります。

話は変わりますが、鳥取という地方で、私が洋画家として描くテーマは「自然の風

景」です。今年から２ヶ所の精神科病院のロビーに「とっとりの四季」をテーマで、季節ごとに風景を描いた油彩画を飾っていますが、これも入院されている患者さんが少しでも心の癒しになればと、また、生きていく力、社会復帰するという意欲の心が育まれればと、そんな思いで行っております。

今回の社会貢献者表彰受賞がローカル紙に掲載されたこともあり、友人、知人から温かい祝意のお手紙、メールを沢山いただきました。その中に「誠実な八木先生に社会貢献者表彰は最もふさわしい表彰です。本当に、本当にうれしい、うれしい気持ちでいっぱいになりました。」と、この言葉に涙がこぼれるほどうれしく、感動しました。

現在、82歳ですが、今まで私にご指導、ご支援、ご援助いただい方々に感謝しつつ、これからもこの賞に恥じることのないように、健康に留意して、今後も、精神障害のある方々に絵画を通して支援していきたいと思います。本当にありがとうございました。

▲病院内に展示されている八木さんの油彩作品

▲絵画クラブで指導をしている病院内の展示コーナー

▲八木さんが院内ポロビーに四季ごとに入れ替え展示している「とっとりの風景」

▲絵画クラブで指導をしている病院内に展示されている作品

NPO 法人ホザナ・ハウス

代表理事
森　康彦

兵庫県

元暴力団組員という異色の経歴を持つ、神戸弟子教会牧師の森康彦さん。少年院などから退院した少年・少女の立ち直りと自立を支援するため、2011年にNPO法人ホザナ・ハウスを設立し、法務省の緊急的住居確保事業の自立準備ホームとして登録。虐待や一家離散、いじめなどを経て、問題行動に走り、負のレッテルを貼られて行き場をなくし、公的支援制度の空白部分でさまよう子どもたちに寄り添い、居場所と食事を提供し、自立を促すよう支援してきた。

森さんは、非行の原因は養育環境にあり、そうした環境や境遇から大人になっても生き辛さを抱える、“アダルトチルドレン”になってしまうと考える。加害者であり、悪環境の中で育った被害者でもある彼らを決して全否定せず、切り捨てずに、聖書の示す愛を持って少年たちの傷を癒し、犯罪の未然防止のために日々奮闘している。現在は自立支援ホーム、放課後デイサービス、障がい者の就労機会を提供する就労継続支援B型作業所なども手掛けながら、その収益を使って子どもたちの法的支援の空白を埋めるべく邁進している。

（推薦者：特定非営利活動法人チェンジングライフ）

この度は、NPO法人ホザナ・ハウスに栄えある社会貢献者表彰をいただき、心より感謝申し上げます。

NPO法人ホザナ・ハウスは、2011年に加古川少年院の少年を引き受けたことから始まりました。当時は、彼らを非行少年・加害者と位置づけていましたが、実は劣悪な養育環境で育った被虐待児であって、かなりの確率で何らかの障害（生きづらさ）を有していると解かってきました。現在は、彼らが加害者である前に、社会的養護を受けられなかった被害者であると確信しています。現在までに100名を超える青少年を支えてきました。

当初は少年院出院者等の出口支援でしたが、徐々に家庭裁判所や児童相談所などから少年を預かる入り口支援に比重が移ってきています。同時に障害者としての支援も進めています。と言うのは殆どの少年が愛着障害を有しており、大人不信が擁護を遠のけている現実があるからです。

NPO法人ホザナ・ハウスは少年たちに衣食住を保証し、キリストの愛をもって接する大人のもとで心と身体の安全を守るハウス運営をしています。そこでは少年を締め付けるルールを設けず、少年の目線に立ち、寄り添うことに徹しています。支援の中心は将来の自立になりますが、何らかの障害（生きづらさ）を有している少年には、福祉に繋げるための働きをしています。また愛着を持たない少年たちに、少なくともSOSが出せるように支援するとともに、それを受けるハウス（安全基地）になりたいと活動しています。

愛着のすり直し支援は、かなりの時間を要するために大きな成果を見るに至ってい

ませんが、大人不信の彼らが、ハウスを居場所と認識してスタッフを家族と慕う。反抗している時は自分を犠牲にしていましたが、徐々に自分の幸せを求めるものへと変わっています。

少年施設は20歳で退所になります。その後は一人暮らしになる少年が多いのですが、結婚し出産した少女、とび職で独立した少年、生活援助を受けながらも作業所に通う少年などと多岐にわたっています。ハウスではそんな少年たちのアフターケアを今も続けています。精神的な支えのなかった彼らの支えになれていることが、最大の成果と言えます。

支援を必要とする少年少女は大勢いることが分かっていますが、目の前にいる数人でも救いの手をのばせればと活動しています。

この度の受賞を糧としてスタッフ共々、今一歩前進したいと願っています。

代表理事　森　康彦

▲放課後等デイサービス事業所ホザナ・ルーム事業所の外観

▲ホザナ・ファクトリー　正面

▲ホザナ・ファクトリー　事業所内作業風景

▲カリス・ホーム正面

▲カリス・ホーム 談話室

社会福祉法人佐賀いのちの電話

副理事長
吉野　徳親

佐賀県

不安や悩み、苦しみを抱えて思い詰めている人たちに寄り添い、一人でも自殺者を減らしたい、という思いの有志が集まり1998年に設立した。寄せられる相談件数は、月平均約1,500件、年間約２万件と、全国にある50の「いのちの電話」中、佐賀県は10番目の多さである。設立以来365日、１日も休むことなく「眠らぬ電話」として活動を続け、昨年で20年を迎えた。相談員は多い時で191名程が交代で対応していたが、現在130名程にまで減少しており、相談員自身の高齢化や両親の介護等による減少と、新規相談員のなり手不足が課題となっている。

自費で養成講座を１年間受講し、実践による研修やスキルアップ研修を積み重ねて相談員となり、維持会費年６千円も自ら負担して無償での活動を行う。仕事や別のボランティア活動を兼務する人も多いことから「ボランティアの中のボランティア」と呼ばれている。真剣な相談だけでなく、怒鳴ったり、いたずらや作り話など心無い電話も少なくなく、相談員の心理的負担は大きいが、それでも本当に必要としている人のために電話の前でベルを待つ。

また、後追い自殺の予防のため自死遺族支援にも力を入れ、毎月１回、同じ境遇の人々が語り合える場「わかち合い（ハートの海）」を開催している。会報「ハートの海」の発行や公開講座などによる広報啓発活動も積極的に行っている。自殺者数は実際に減少しており、自殺者対策に貢献してきた功績は大きい。

（推薦者：佐賀県庁　県民環境部　県民協働課）

この度は、私ども「佐賀いのちの電話」に、栄誉ある表彰を賜り、心より御礼を申し上げます。

佐賀いのちの電話は昨年（2018年）開局20周年の節目を迎えました。「自殺予防いのちの電話」として開局以来、24時間365日年中無休で、電話相談活動を続けてまいりました。その間、ボランティア相談員約500人が交代で電話当番に入り、人々の悩みや苦しみに耳を傾けて参りました。今回の受賞は、いのちの電話を第一線で支えてくれている相談員の献身的な労苦に対する「ご褒美」だと思っています。

表彰式は豪華なうえ、厳粛なものでした。準備から本番に至る貴財団職員様の温かくきめ細かな気配りに感謝いたします。安倍昭恵会長はじめ選考委員のスピーチは、参加者に喜びと励ましを与えてくれました。表彰式の進め方も映像による紹介など趣向をこらしていただき、来場者、会場が一体となる演出がとても良かったです。

受賞者の方々の受賞内容も多岐にわたり、皆様の志や熱意に感心するばかりでした。地球規模から地方の片隅、皆様の奉仕活動を目の当たりにして、日本人の「無私の愛」がその活動の原点であることを確認しました。

いま社会では貧困や格差が拡大し、それがいろいろな社会問題をもたらしてきています。高齢者や子どもまで「生き辛さ」が広がっています。そういった人々の隣人として、いのちの電話の役割はますます高まってきています。

私たちの電話相談活動は、縁の下の力持ち的な存在ですが、孤独な人たちの精神的な援助となるよう努めています。今回の表彰式に参列し、私たちに課せられた使命を再確認し、今後一層、相談活動の向上に向け励んでいく所存です。

副理事長　吉野　徳親

▲養成講座、実習を経て総会で電話相談員に認定

▲苦しみや悩みの電話に耳を傾ける相談

▲電話相談員を目指し、宿泊養成講座

▲資金作りにハンドメイドの小物などを販売

▲相談員全員が集まり、全体研修会

認定 NPO 法人多言語社会リソースかながわ（MIC かながわ）

理事長
松野　勝民

神奈川県

日本で暮らす外国籍の方が、「ことばの壁」のために適切な医療を受けることができずに、時によっては命にかかわることもある。国籍、文化にかかわらず、だれもが安心して医療を受けられるような社会にしたいという思いと「ことばで支えるいのちとくらし」を活動の理念に、在日外国人の支援を行う「特定非営利活動法人多言語社会リソースかながわ（MIC かながわ）」は、2002年に設立された。

医療通訳派遣として協定医療機関（69病院）へ英語、中国語、スペイン語等13の言語に対応する。年間7,000件を超える通訳を派遣する事業を中心に医療通訳の養成と研修とともに普及と啓発、学校や児童相談所等公的機関への一般通訳の派遣、外国人無料健康相談会への通訳派遣、災害時の外国支援につながる活動等、医療者と患者の間に入って「ことばの壁」を無くす活動を続けている。

（推薦者：川口　暁子）

この度は「特定非営利活動法人多言語社会リソースかながわ」（MIC かながわ）を社会貢献者団体として表彰していただき、誠に有難うございます。

「ことばで支える いのちとくらし」～Bridging Languages to Support Your Life～

これが MIC かながわのキャッチフレーズです。

MIC かながわは「外国籍県民の生活支援」を目標に2002年に発足しました。特に多くの外国籍県民が不安に思っている「医療機関での言葉の問題」を解決すべく、神奈川県との協働事業で医療通訳派遣を中心に行っている団体です。医療機関以外にも学校・家庭裁判所・児童相談所・行政窓口等々への通訳派遣も行っています。発足した2002年度は 6 病院に年間310件の派遣でしたが、2018年度は79病院に7,399件の派遣を行いました。言語数も 5 言語（中国・韓国朝鮮・スペイン・ポルトガル・タガログ）から13言語（5 言語＋英語・タイ・ベトナム・ラオス・カンボジア・ロシア・フランス・ネパール）に増やしました。これは、その言語の人口の推移・医療機関からの要請等を加味して増やしています。

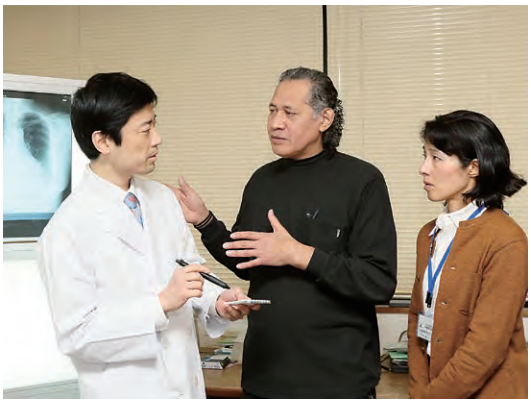
医療現場でコミュニケーションが取れることは外国籍県民の安心だけではなく、医療機関側も安心して正確な治療が提供できることに結びつきます。生きる権利は誰もが平等に持ち合わせています。医療はその最後の砦だと思っています。我々の普段の生活の中でコミュニケーションが取れないという経験はあまりないと思います。特に病気・けがという不安を抱えている中では、その不安はどれほどのものになるでしょう。これから、ますます外国籍の方が増えていく傾向がある中で、多文化共生を実現すべく努力をしていきたいと思います。

2019年はラグビーの W 杯で日本中が盛り上がりました。2020年は東京オリンピッ

ク・パラリンピックがあり、今年以上の盛り上がりとなるでしょう。当然、多くの外国籍の方々が来日します。それらの方々への対応も必要になりますが、日本に生活の基盤を置いている外国籍の方々への支援を忘れてはなりません。医療通訳派遣制度は全国的には十分に普及していない状況ですが、地域によっては地道に頑張っているところもあります。今後は、少しでも通訳派遣事業の発展に寄与できるように活動をしていきたいと思っています。

最後に、今回ご推薦いただいた川口暁子様をはじめとし、これまでMICかながわの活動を支えていただいている神奈川県及び市町村・医療機関・通訳スタッフ・事務局員など関係者の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

理事長　松野　勝民



▲医療通訳（神奈川県提供）

▲新任医療通訳スタッフ養成研修
新規に登録する医療通訳ボランティアの養成講座です。毎年１回開催しています

▲医療通訳スタッフ現任者研修
医療通訳スタッフとして登録し、活動しているボランティア向けの講座です。年３回開催し、登録スタッフの参加を義務付けています

▲一般通訳研修会
学校や児童相談所などの公的機関へ派遣する「一般通訳」向けの講座です

▲コミュニティー通訳養成講座 タガログ語ロールプレイ
タガログ語やベトナム語など通訳の担い手が少ない言語のボランティア養成講座です

板倉　未来

新潟県

子どもの頃の経験をもとに、大人になったら傷ついた子どもたちを絶対に助けると心に誓い、2004年から虐待で助けを求めている親子や、ひきこもりの子どもたちの支援活動を始めた。2011年に新潟市でNPO「母と子の生命をつなぐオーバージーン」を設立し、児童自立支援施設や児童養護施設の子どもたち、施設退園後の子どもたちの支援や命のレスキュー、緊急保護、自立に向けた生活のサポートを続けている。高齢者や子どもたちの居場所となる「OHANA子ども食堂」を毎週水曜日に開催。「死にたい」が「生きたい」という希望に変わる心と体を癒す居場所「OHANAの家」を五泉市にオープン。帰る家のない子どもたちの実家となっている。

（推薦者：中山　アキ子／沖　知子）

この度は「社会貢献支援者表彰」という素晴らしい賞を頂きありがとうございました。今日まで活動を支えてくださったOHANA応援団の皆様の想いと共に壇上に上がらせていただきました。心から感謝いたします。

「日本という美しい島国から虐待という暴力を無くし、帰る家がない子どもたちのために居場所をつくる」これが幼い頃からの私の夢でした。愛されたいと願う両親から暴言を吐かれたり、抱きしめられたいと願うその手で暴力を受けて、心と体に傷を負った子どもたちの傷の深さは計り知れず、長い年月をかけて癒していかなければ回復できません。私自身、今もなお、その傷や痛みを抱え向き合いながら目の前の子どもたちの痛みや悲しみ怒りに寄り添っています。

私が今とても大切にしていることは子どもたちの声なき声を聴くことです。「助けて！」と叫ぶ声がかき消され、その声を出すことすら許されない状況や環境の中で、痛みと共に絶望し、心は凍りつき感情を麻痺させていく、その心と感情を動かしていくには喜びと感動体験を重ねていくこと、どんな自分も愛される、あるがままの自分を受けいれてもらえる、許されるという今までと真逆の愛を体験し経験として積み重ねていくこと、全否定され、批判されてきた人生から自己肯定感、自尊心を、時間をかけて取り戻していく地道な愛を重ねていきます。

居場所さえあったら闇の道に進まなくていい、困ったとき、苦しいとき、帰る場所があると思えることがどれほど子どもたちの生きる希望になり生きようとする命を支える力になるか。居場所さえあったら自分自身を癒し回復させていけます。負の連鎖を断ち切るため年月をかけて愛の連鎖に変える力が生まれます。自分なんて生まれてこなければ良かったと思っている子どもたちに「生まれてきてくれて ありがとう」「生きていてくれて ありがとう」この言葉を伝えるために誕生月の子どもたちの名前を書いたバースデーケーキを毎月、施設に届けています。

虐待による傷が癒えない状態で、何の後ろ盾もなく社会に巣立つしかない子どもたちの中には生活が破綻し若年ホームレスとなったり、生きるために体を売ったりしている子どもたちがいます。そのような流れを止めるために退園後のケアが重要だと考えます。本当なら自然に身につくはずの家庭というものを知らない、家族というものがわからない子どもたちに何も大切なことを教えずに社会に放り出すのは負の連鎖を生みだす事にしか繋がりません！ 子どもたちが自力で生きていけるように大切なことを学ぶ場が必要だと感じて今OHANAの家で子どもたちの生きる力を育てています。

施設に入っている間に変わらなければいけないのは子どもではなく親だと私は思います。子どもを施設に入れて終わり！ではなく、その子どもだけが犠牲になるのではなく親自身が自分の問

題に向き合っていく必要があります。親も虐待を受けてきたケースがとても多いので親の子育てをサポートする親の教育システムを構築していきたいと考えています。虐待をしてしまうママたちが同じようなことを繰り返さないようにするにはどうしたら良いか、個人レベルでなく社会問題として取り扱っていく大きな課題だと感じ、ママになるための学校、子どもを愛するには、自分を愛するにはどうしたらよいか､愛を学べる愛のスクールを2020年から全国で開催していきます。

子どもから高齢者まで世代を越えて安心して集うことができる居場所としてOHANA食堂を立ち上げました。六畳二間に多い時で80名を超える人々が集い、楽しい笑い声いっぱいで食卓を囲んでいます（子どもたち、シングルマザー・ファーザー無料)。地域社会の絆が育まれ困っている時や苦しんでいる時に「助けて」と言える関係ができることで高齢者の孤独死を防ぐことに繋がります。シングルマザーを応援することで生活の負担はもちろん精神的なストレスの軽減やネグレクトや身体への暴力などの虐待を受けている子どもの早期発見にも繋がり、誰にも相談できずに自分を責めて苦しんでいるお母さんや子どもたちに寄り添えたらと願い、立ち上げ継続してきました。また子育てに悩むお母さんが相談することができる機会が増えるように子育て相談会を学校と連携して開催しています。さらに新潟県五泉市に全国の方からの応援を受けてOHANAの家を立ち上げ、施設退園後の子どもたちやDVを受けた親子などのサポートをしています。精神科医の先生からOHANAの家という処方箋を出され訪ねて来られる親子もいます。就労支援として竹炭を作ったり畑で無農薬野菜を育てたり、子どもたちの自立に繋がっていくような活動を広げています。

～OHANAの家～

●帰る家がない子どもたちが帰ってこられる居場所
●虐待を受けている子ども、虐待をしているママたちを癒す居場所
●生きづらさを抱えて社会に順応することができない子どもたちや、お年寄りが支えあう居場所
●シングルマザーをサポートする居場所

子どもたちの居場所OHANAの家を一緒に守り育てていただけると嬉しいです。

社会貢献者表彰式典では受賞者の方々とお話ができる御配慮のおかげで交流を深めることができました。この様に同じ志で活動されている皆様と横に繋がる機会を賜り財団の皆様の温かいお心遣いに心からお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

これからも私は目の前の子どもたちの命を抱きしめ、愛を伝えていきます。

▲絵本の読み聞かせ

▲施設退園後のサポート　誕生日にケーキを届ける

▲OHANA食堂　お誕生会

社会福祉法人ももやま福祉会ぐんぐんハウス

施設長
谷村　敏幸

京都府

支援学校を卒業した子どもの活動場所として、「どんな障害があっても、どんなに障がいが重くても、僕らも仲間がほしい」という保護者の願いで1984年に「人として、豊かに生きる」を理念に京都市で設立された。生活介護事業や就労継続支援Ｂ型事業所を運営し、和紙の製造、加工、販売も行っている。

施設は特に重度の障がい者を受け入れ、親の高齢化に伴い、緊急時に預かれる場所や将来、自立した生活が送られるようになる為の訓練の場として、短期入所事業も行っている。また、近隣の障がい児を持つ親御さんに向けて子育てサロンや親子食堂等、作業体験を通じて進路選択ができるようにと様々な事業を実施している。利用者の高齢化に伴い、親亡きあとの暮らしの場の確保に向けて、今年、男女それぞれのグループホームも開設した。

（推薦者：特定非営利活動法人京都ほっとはあとセンター）

「新たな挑戦」

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の第53回社会貢献者表彰受賞者として、安倍昭恵会長から表彰をいただき感謝の気持と心からの御礼を申し上げます。

ぐんぐんハウスは「どんなに障がいが重くても地域の中で仲間たちと共に働きたい、仲間がほしい」という願いのもと、1984年に運営委員会形式による療育作業所として利用者３名と職員３名で開所しました。当時は養護学校卒業後の進路先が少なく、在宅を余儀なくされる方が多数おられました。開所以来、無認可共同作業所の形態で障がいのある人たちと共に活動に取り組んで来ましたが、障がいがあることで社会の中で生きることの困難さや、沈黙のままに家族で困難を抱えている現実に向き合うこととなりました。一人でも多くの人を施設に迎え、職員も安心して働ける事業所運営を目標に、2003年に「社会福祉法人ももやま福祉会」を設立し、現在地に新たな施設を建て2004年に活動を開始しました。

施設は重い障がいのある大勢の方にご利用いただいていますが、ご家族の高齢化や「子どものため、おちおち病気もできない」といった状況に加え、利用者の身体機能の低下が顕著にみられ、利用者の多くが複数のショートステイを利用していることが判明しました。このことから日中活動の場だけなく、将来の自立生活を経験していただくためにも、ショートステイの開設を求める声が多く出され、2012年にショートステイ事業をスタートさせました。2019年からは「親なきあと」の暮らしを支えるため、男女それぞれのグループホームを開設することができました。

地域に向けた活動として、障がいのあるお子さんのご家族を対象に「子育てサロン」や「親子食堂」を開催し、情報提供や相談に応じています。また、お子さんの将来の進路を親子で考える機会づくりとして「作業体験会」等も開催しています。

開所以来35年間を振り返りますと、「どんなに障がいが重くても、人として豊かに生きる」を理念として、利用者・家族・職員・そして地域の皆様とあゆみを進めてまいりました。この度の受賞を大きな励みとして、事業所名の「ぐんぐん」が「伸びる」を意味するように、より高く太い幹となり、障がいのある人もない人も「共に豊かに暮らせる社会」の実現に向けて、新たな挑戦を続けてまいります。

施設長　谷村　敏幸

▲「おやこ食堂」活動風景（施設の作業体験をしよう）

▲「おやこ食堂」活動風景（おにぎりを作ろう）

▲醍醐グループホーム（女性専用）

▲栂辻日中活動棟とグループホーム（男性専用）

中西　幸子

北海道

育児放棄により泣かない赤ちゃんが増えたという番組を見て何か力になりたいと思っていた中西さんは、子育てを終えて夫婦二人の生活になった時から里親を始めて16年、携わった子どもは８名になる。最初の子どもは刑期中の母親から生まれた生後８日の子だった。出所した親が夫婦で愛情を注いで育てていたその子を引き取りに来たが、その後再び児童相談所に預けられることになった。母親と児童相談所に何度も掛け合って、再度養育したいと懇願したが聞き届けられなかった。こうした自身の手を離れた子どもの人生が振り回される辛い体験や、親権者、児童相談所等とのやり取りで奔走した経験を基に、2012年からは地域で里親をしている人のメンターとして月に１度、子どもも交えて日々の相談にのる会合を開催している。育てられない親にも、育てて貰えない子どもにも、そして子どもを引き受けた里親にも、必要な時に手を差し伸べられるようにしたいと、それぞれの立ち場の人々と信頼関係を築き、いのちを繋ぎ、大人の心の負担の軽減化と共に、子どもが幸せに育てられる環境づくりに尽力されている。

（推薦者：小澤　輝真）

現在、２人の里子と５日前に突然、緊急一時保護した４歳の男の子の５人で生活しています。振り返ってみますと、27歳姉、26歳妹（２歳男児の母）、16歳、13歳、10歳、５歳の女の子たちとの出会い、只々、毎日子どもたちとの目の前の生活でいっぱい。ようやく小学４年生（10歳）となり自分の回りを見回す時間が少しできました。

里子たちの実親さんを支えなければ親子としての人生が歩めないと気づいた17年前。

我が子よりも誰よりも自分が一番のママ。

子どもへの愛情はあるけれど生きるのが辛いママ。

病気のため子どもの「ママに会いたい、声が聞きたい」の思いさえも受け止められないママ。

その時々の子どもの思いを受け止めてママに根気強く伝え続ける力が大切だと思います。強すぎると反感を持たれる、弱すぎると相手の心に届かない、むずかしい。

この度の表彰で少しわかりました。私の里親としての心情を発信する場を与えていただいたのだということを。とかく暗いイメージを持たれることの多い世間一般の視線は見えないからマイナスイメージとなることを。

子どもたちもそれぞれに、育てにくい子、発達障害の子、虐待を生き延びた子、知的に問題のある子、親子三代にわたる負の連鎖の子等さまざまです。里親家庭で安心、安全、安定した環境で育ち、社会に出て仕事をして自分の人生を作り、税金を納めることを見据えての子育てです。

里子たちは、自分の問題で里子になったわけではない、家庭それぞれの事情なので、子どもたちには全く責任はない。自分を卑下することはない、普通に生きる環境を幸

せと受け止めて欲しい。どんな未来も自分の手で作っていける、サポートしてくれる人は沢山いることを。

我が家の２人に血縁はない、姉妹として必要なときには２人で力を合わせ、又一方、必要な時には、実親、実姉、実兄の繋がりも繋ぎながら自分でその都度、選択しながら生きて行って欲しい。

社会の流れが激しく早い。これからの時代、地に足をつけて生きて行って欲しい。

里親も児童相談所もパーフェクトではない。それぞれ知恵を出し合い協力して子どもを守っていく。里親もごくごく普通の人たちです。一人で抱え込むことなく子育てしましょう。子どもは社会の子なのです。

この度は大変ありがとうございました。

追伸

過去に社会貢献を受賞された方々とのご縁があって協力できることが出来るとさらに大きな力となり、社会を支えることが出来るのではないかと思いました。

▲子どもたちのおもちゃ

石川　誠

東京都

脳神経外科医として勤務していた1970年代の初め、患者の術後に障がいが残っても何もされていないことに疑問を抱き、命を助けるだけでなく、家に帰って自立した生活が出来るように回復させるまでが真の医療と考え、当時一般的ではなかった「リハビリテーション医療」に取り組み始めた。

1986年に赴任した高知県の医療法人社団近森病院で、「どんな患者も寝かせきりにしない、ベッドから起こして動かし、自立できる力を取り戻させる」と医師、看護師、各種療法士、ソーシャルワーカーなどがチームを組んで一丸となってリハビリをする体制へ内部改革を行った。退院した患者用の通所リハビリや訪問リハビリの仕組みもつくりあげ、これらの取り組みは国も認める「回復期リハビリテーション病棟」のモデルとなった。

2002年に医療法人社団輝生会を発足し、現在は「初台リハビリテーション病院」、「在宅総合ケアセンター元浅草」「在宅総合ケアセンター成城」「船橋市リハビリテーション病院」「船橋市リハビリセンター」の５拠点を運営している。

回復期リハビリテーション病棟のモデル及び在宅総合ケア体制を確立し、全国に普及させ、日本のリハビリテーション医療体制を築きあげ、地域リハビリテーション（地域包括ケア）の推進に貢献している。

（推薦者：船橋市　市長　松戸　徹）

この度、公益財団法人社会貢献支援財団から社会貢献者表彰の栄誉を授かり誠に光栄に存じております。

受賞者は、福祉界で地道な努力を積み重ね、大変感動的な成果をもたらした方々が大多数であり、わたくしのような医療職は異色なように思えました。

小生は、1973年に医師になった当初は脳神経外科の勤務医でした。長野県の佐久総合病院に時代に、当時の院長の若月俊一先生から地域医療の神髄を教わりました。また、当時の脳神経外科は発展途上であり、手術後の後遺症（身体障害等）に対するアプローチが乏しいことに対してもするどく指摘されました。そのことをきっかけに脳神経外科からリハビリテーション科へと方向転換したのですが、当時の日本のリハビリテーション医療は全く未整備状態であり、「寝たきり老人」「寝かせきり老人」という言葉まで出現する時代でした。1978年からは虎の門病院でリハビリテーション医としての修業を積み、入院によるリハビリテーションで重要な点は、何よりも看護・介護職による自立支援のケア体制の確立であることに気づきました。その基盤の上に多職種（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、社会福祉士、栄養士等）によるチームアプローチが充実すれば大きな改革ができると確信したのです。しかし、当時の医学会、医療界は極めて保守的な体質をもち、いわゆる縦割り行政といわれる体制に似ており、チームアプローチの推進は簡単ではありませんでした。

そこで1986年に虎の門病院から高知市の近森病院に拠点を移すことにしました。い

ろいろ苦労はありましたが、なんとか看護・介護のケア体制が充実し、多職種によるチームアプローチも確立し、リハビリテーション専門病院として近森リハビリテーション病院の活動も軌道に乗りました。さらに退院後の支援としてリハビリテーションを核とした在宅総合ケア支援体制も整備することができ、急性期～回復期～生活期のリハビリテーション医療体制が具現化することができたのです。この体制は厚労省の気に入るところとなり、2000年の介護保険制度施行と同時に医療保険で回復期リハビリテーション病棟の制度が創設されることになりました。

2002年からは東京に戻り、初台リハビリテーション病院、在宅総合ケアセンター元浅草、在宅総合ケアセンター成城、船橋市立リハビリテーション病院、船橋市リハビリセンターを立ち上げ、回復期と生活期のリハビリテーション医療サービスを展開しております。

現在は地域包括ケアの時代となっておりますが、この地域社会に対する活動が大きなテーマとなっております。

▲病棟の日常生活における移乗・移動動作訓練

▲食事中に嚥下・摂食・食事動作の訓練

▲医療法人輝生会の研修

▲排泄は24時間必ずトイレで

佐藤　修

大阪府

1970年に大阪府立堺ろう学校へ高等部教員として就任以来、聴覚障がい者、聴覚との重複障がい者、高齢聴覚障がい者が生涯を通じて安心して暮らせるための環境づくりを目標に尽力してきた。

学校卒業後の進路としての共同作業所「もず共同作業所」や通所施設、家族と離れても安心して生活できる生活施設「なかまの里」、老後の安心のための特別養護老人ホーム「あすくの里」など、その全ての施設の土地探しから、資金調達、地域住民への説明や、建設、職員確保、地域とのコミュニケーションなど全てに関わり１つ１つ歩を進めてきた。またチャリティコンサートや障がい者とのアイラブフレンズマラソン大会など、多くのイベントを企画し、企業にも働きかけて資金調達に奔走するなど、様々な課題の解決もしてきた。

自身も手話を身につけ、ろうあ者と同じ目線で35年以上に亘って取り組んできた姿に、ろうあ者関係者から信頼され、様々な方面から助言を求められる存在となっている。今後も大阪の５ブロック全てに参加通所型施設を作り、ろうの方々が身近なコミュニティの中で集まり、一緒に生活したり仕事ができる環境づくりを目指している。

（推薦者：全国ろうあヘルパー連絡協議会）

この度は、社会貢献者表彰の栄えある受賞に授かり、ご推薦とご選考をいただいた方々をはじめ、これまでの活動を支えていただきました皆様にあらためて感謝申し上げます。ありがとうございます。

受賞式に出席しまして、虐待児童、貧困児童、難病、不登校児、自殺防止など国内外の様々な分野で社会貢献されている方々の活動を知り、大変感銘を受けました。

私は、聴覚障害者の方が安心して利用できる社会的資源が非常に少ない中、聴覚障害者、とりわけ聴覚障害のほかに知的障害、精神障害、視覚障害を二重、三重に合わせ持つ方々の就労支援、生活支援、自立支援を行うため、障害者支援施設「なかまの里」（定員60名　1996年開所）、障害者福祉サービス事業「あいらぶ工房」（定員40名　2007年開所）、北摂聴覚障害者センターほくほく（定員20名　2015年開所）を実現してきました。さらに、聴覚障害者が高齢になったとき手話で介護が受けられる特別養護老人ホーム（定員80名　2005年開所）、デイサービス（定員20名）、ショートステイ（定員20名）、ケアプランセンターを、聴覚障害者、手話関係者、聾学校（今は聴覚支援学校）の父母と教職員の方々と共につくって参りました。

手話をはじめとするコミュニケーションの共有と保障、そして同じ聴覚障害者のなかまの集団が生きる力を育んでおります。

今回の受賞は、今までの活動を評価していただいたことに大変喜んでおります。多くの仲間の代表として受賞させていただきました。

聾学校高等部の教員から福祉の仕事に変わって、26年目になります。福祉の仕事のほうが長くなりました。

今回の受賞の推薦が、施設づくりに共に頑張って来ました聴覚障害者の方々からであることが喜びを一層大きくしております。

2020年４月には、新たに就労支援施設（定員45名）を開所する予定でおります。聴覚障害者が安心して利用できる施設がまだまだ不足しており、今回の受賞を励みにこれからも社会的資源づくりに頑張っていこうと気持ちを新たにしております。ありがとうございました。

▲なかまの里　　なかまと職員の全員写真

▲トークセッションでの司会

▲特別養護老人ホームあすくの里　上棟式

▲サマースクールと家族の会　参加者全員写真

▲全国の仲間と

▲特別養護老人ホームあすくの里　全景

松下　照美

ケニア

23年にわたり、アフリカ・ケニアの地方都市テイカに住み、貧しい子家庭の子どもたちの就学支援、給食支援、ホームの運営、ストリートチルドレンの子どもたちの自立や就学支援に取り組んでいる。

松下さんがアフリカを最初に訪れたのは1990年代前半。ドキュメンタリー映画監督の小林茂氏に同行した取材旅行で出会った子どもたちが忘れられず、1994年にボランティアとして移り住むことになる。1996年にはケニアへ移住。1999年には活動拠点となるNGO「モヨ・チルドレン・センター」を立ち上げ、2005年には入所施設を開設した。

現在は23人の子どもたちと寝起きを共にする一方、スラム街やタウン、学校等を見回り、子どもたちに手を差し伸べている。路上には、シンナーなど薬物中毒の子どもが大勢いて、更生を妨げているとして、2017年には外務省の「草の根無償資金」と日本国内からのクラウドファンディングの募金によって、ドラッグリハビリセンターを開設した。農作業のプログラムを導入しながら、粘り強く支援に取り組んでいる。

（推薦者：徳島新聞社　東京支社）

社会貢献支援財団から、私が社会貢献者賞受表彰内定の報を受けたのは去る２月７日。「？」と首を傾げました。社会貢献者表彰という賞については聞いていましたが、まさか私が選ばれるなどとは夢にも思っていませんでした。「寝耳に水」とはこういうことを言うのでしょうか。私を推薦くださったのが、私の地元の「徳島新聞東京支社」だとお聞きし、納得しました。と言うのは今までに何度か私の活動を取り上げてくださっていたからです。有り難いことでした。

思い起こせば、1994年にウガンダの子どもたちに出会い、それから２年ウガンダで、その後ケニアへ移住、ケニアの子どもたちと共に歩み始めて23年が過ぎました。合わせると四半世紀をアフリカで過ごしたことになります。その間、色々なことがありました。嬉しいこと、楽しいこと、悲しいこと、辛いこと、腹立たしいこと等々。ただ不思議にも一度も日本へ帰ろうと思ったことはありませんでした。子どもたちの魅力がそれだけ強かったということでしょうか。それとも子どもたちの命に関わり、私でも何かの役に立てる、必要としてくれる存在への喜びだったのでしょうか。

現在はケニアの首都ナイロビから北東に約50キロのティカという街で、子どもたちのケアをしています。①ホームの運営（男の子・４歳～16歳・18名）　②ストリートの子どもたちのリハビリ（有機農法を通じてのドラッグ・リハビリセンターを中心に）　③貧しい家庭の子どもたちの学費支援　④小学校での給食支援を４つの柱として活動しています。日々、子どもたちが起こす問題に振り回されながらの毎日ですが、笑いあり、涙ありの日々は私にとってはかけがいのないものです。多くの皆様に支えられながらのこの25年間でした。現在74歳になり、いつまで現場で活動できるのか心許ない思いもありますが、身体の続く限り、必要とされる限り、命のある限り子ども

たちと共に歩み続けたいと思っています。

最後になりましたが、今回の受賞に心よりお礼申し上げます。私をアフリカに導いて下さったドキュメンタリー映画監督・小林繁氏、私が主宰するセンターの役員会議長・ボビー・ムカンギ氏、私の姉、妹に同伴されて授賞式に臨めたのは本当に嬉しいことでした。加えて多くの受賞者の方々のお仕事に触れ、今後への大きな力と励みを頂けたのは、有り難いことでした。こういう機会をくださった主催者の皆様へ、心よりの感謝を捧げます。

▲ニューホームの庭に池を造り「テラピア」の養殖を始めた

▲プラゴミ買い取り業者に集まる子ども ボトルにはシンナーが入っている

▲給食支援を受ける子どもらと松下さん

▲ドラッグリハビリセンター

▲ドラッグリハビリセンターのスタッフと松下さん

▲ドラッグリハビリセンターの農場

阿部　亮

東京都

19歳の時に世界を旅する中で、出会った貧しい子どもたちの生きる力の強さに感銘を受け、帰国後、事業を興し、経営者として成功すると、2008年からその収益をカンボジア・ネパール・ブルキナファソ・ミャンマーでの学校建設に役立て、これまでに12校を建設。

利益を得る目的は、社会貢献を行うため、とするが、真剣に取り組むには資金力とともに体力もいる、それには若いうちだと、40歳で経営権を譲り専従できる基盤として財団法人を設立。学校建設や教育支援を軸に、カンボジアで子どもに無料で医療提供を行う医療センター設立への支援や、国内においても虐待やネグレクトされた子どもを預かる団体をサポートしている。

また、毎週月曜日にはニッポン放送で、自らがメインパーソナリティーを務め、社会貢献者をゲストに招き、国内外で活躍するNGO・NPO、企業のCSR活動を紹介する番組を10年に亘り続け、広く社会貢献を周知する活動を行っている。

皆さんこんにちは！　今年で放送10年になる、ニッポン放送「阿部亮のNGO世界一周！」のラジオパーソナリティをしている阿部亮です。

青春時代は北海道の大地で、「声は電波にノッテ、あなたの街に、あたしの想いを届けに旅にでる♪」というジュディマリの流行歌「RADIO」を口ずさみながら育ちました。

ニッポン放送「阿部亮のNGO世界一周！」では、これまでに200人近いNGO、社会起業家、社会貢献者をゲストにお迎えし、その活動を紹介し、応援しています。

僕自身も39歳の時に、創業した会社を引退する決意をし、その資産を寄付し、「阿部 亮財団」を創設、世界にソーシャルインパクトの波をどんどん起こすべく頑張っています。

この場を借りて、僕が学校や病院を建てた時に、挨拶として現地の言葉で話すスピーチを皆さんにもご紹介させてください。

「こんにちは、みんな元気ですか？」
「僕の言葉は分かりますか？」
「僕の言葉は伝わっていますか？」
「僕は日本人です。僕の名前は阿部亮です。」
「今日、僕はみんなにこの学校と病院をプレゼントします。」
「この学校や病院は、僕の会社の社員とお客様のお金を合わせて作りました。」
「僕は19歳の時に１年をかけて陸路で世界を一周する旅をしました。」
「僕は旅の途中で、たくさんの人たちに助けられました。」
「僕はとてもうれしかった。みんな優しかった。世界は優しかった。」

「なのに僕は、まだ僕を助けてくれた世界の人たちに恩返しができていないのが悔しいです。」
「だから僕は世界に恩返しがしたいです。」
「僕の恩返しは、世界に学校や病院を建てることです。」
「今までに僕は、カンボジア、ネパール、ブルキナファソ、ミャンマーに12の学校と病院を作ってきました。」
「子どもたちは、この学校でがんばって、楽しんで、いっぱい勉強してください！」
「病でつらい人は、この病院で早く元気になって、楽しんで、いっぱい仕事をしてください！」
「そしていつかみんなを、僕の母国、世界で一番豊かで幸せな国、日本に招待したいです。」
「みんな、僕に世界への恩返しのチャンスをくれて、ありがとう。」
「世界への恩返しの旅はまだまだ続きます！」
「いつかまた、世界のどこかで会いましょう！」

▲カンボジア　こども医療センター訪問

▲ニッポン放送・阿部亮の NGO 世界一周！収録現場

▲カンボジア　プレイクラー小学校再訪問

▲ミャンマー　ティディミンガラシュエワー小学校贈呈式

▲アフリカ　ブルキナファソ　カバネ小学校贈呈式

年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野＼年／回	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	小計
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

分野＼年／回	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	小計
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

分野＼年／回	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10		小計	受賞者合計
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16		343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6		72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32		274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42		384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12		79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19		104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20		298	1134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0		27	1658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147		1581	11458
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

年／回 分野	29回 平11	30回 12	31回 13	32回 14	33回 15	34回 16	35回 17	36回 18		小計	受賞者合計
第一部門 緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2		41	
第二部門 多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18		105	
第三部門 特定分野の功績		4	7	8	8	11	9	9		56	
（海の貢献賞）			2	1	3	3	4	2		15	
（国際協力）		2	2	1	0	2	0	0		7	
（ハッピーファミリー）		0	0	2	1	3	1	2		9	
（21世紀若者）		2	3	4	4	3	4	5		25	
こども読書推進賞					3	3	3	3		12	
小　計	20	24	24	28	29	29	28	32		214	11672
開 催 日	11/10	11/22	10/29	11/19	11/ 4	11/15	11/16	11/20			
式典会場	④	①	④東京全日空ホテル								

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。
平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。
平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。
平成15年度よりこども読書推進賞を新設。

年／回 分野	37回 平19	38回 20	39回 21	40回 22	41回 23	42回 24	43回 25	44回 26	45回 27	小計	受賞者合計
人命救助の功績	9	13	11	11	8		3	9	0	64	
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		36	35	47	293	
特定分野の功績 （海の貢献賞）	1	2	3	5	2		2	0	0	15	
海への貢献の功績								3	2	5	
こども読書推進賞 表彰式：6／26 会場：虎ノ門パストラル	1									1	
東日本大震災における貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル						128	12			140	
小　計	44	50	48	50	49	128	53	47	49	518	12190
開 催 日	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5 / 1	11/25	12/ 1	11/30		
式典会場	④ ANA インターコンチネンタルホテル				⑤帝国ホテル						
											12190

平成19年度より分野名を変更。こども読書推進賞は最終回。
平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。
平成26年度より特定分野の功績（海の貢献賞）は海への貢献の功績に変更。

年／回 分野	46回 平28	47回 28	48回 29	49回 29	50回 30	51回 30	52回 令1	53回 1		小計	受賞者合計
人命救助の功績	9		11		11	8	4	3		46	46
社会貢献の功績	11	51	17	53	29	32	33	37		263	263
小　計											309
開 催 日	7 / 1	11/28	7 /21	11/27	7 / 6	11/26	7 /22	11/25			
式典会場	⑤帝国ホテル										
											12499

平成28年度より年に２回式典を開催。

都道府県別受賞者内訳

県　名	第52回までの累計	第53回受賞者	受賞者数
北海道	662	3	665
青森県	180		180
岩手県	216		216
宮城県	394	1	395
秋田県	124	1	125
山形県	156		156
福島県	178	1	179
茨城県	201	1	202
栃木県	150		150
群馬県	243		243
埼玉県	473		473
千葉県	403		403
東京都	1,182	6	1188
神奈川県	630	2	632
新潟県	261	2	263
富山県	144		144
石川県	143		143
福井県	205		205
山梨県	135		135
長野県	201		201
岐阜県	216	1	217
静岡県	313	2	315
愛知県	318	1	319
三重県	164		164
滋賀県	100	1	101

県　名	第52回までの累計	第53回受賞者	受賞者数
京都府	212	2	214
大阪府	495	2	497
兵庫県	519	2	521
奈良県	113		113
和歌山県	144		144
鳥取県	92	2	94
島根県	111		111
岡山県	308	1	309
広島県	415	1	416
山口県	272		272
徳島県	177		177
香川県	196		196
愛媛県	150		150
高知県	75		75
福岡県	549	2	551
佐賀県	132	2	134
長崎県	268		268
熊本県	231	1	232
大分県	127		127
宮崎県	74		74
鹿児島県	141	1	142
沖縄県	165	1	166
その他	101	1	102
合　計	12,459	40	12,499

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計
※県名は、受賞者居住地の都道府県名　その他は居住地が海外
※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計として足した数。

役員・評議員一覧

会　　長	安倍昭恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副会長	内館牧子	脚本家　東北大学相撲部総監督
理　　事	浅野加寿子	放送評論家、プロデューサー　NHK 会友
理　　事	天城　一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理　　事	犬丸徹郎	ベルナルドジャパン株式会社　副会長
理　　事	澤井俊光	一般社団法人 共同通信社　編集局総務
理　　事	増岡聡一郎	株式会社 鉄鋼ビルディング　専務取締役　COO
理　　事	屋山太郎	政治評論家
監　　事	篠原由宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監　　事	中村元彦	中村公認会計士事務所　所長
評議員	石井宏治	株式会社 石井鐵工所　取締役社長
評議員	井沢元彦	作家
評議員	ロバート キャンベル	国文学研究資料館　館長
評議員	久米信行	久米繊維工業株式会社　取締役相談役
評議員	徳永洋子	ファンドレイジング・ラボ　代表
評議員	永嶋久子	株式会社 資生堂　元取締役

（五十音順）

公益財団法人　社会貢献支援財団

設　　立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6　クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
Ｔ Ｅ Ｌ：03-3502-0910
Ｆ Ａ Ｘ：03-3502-7190
Ｕ Ｒ Ｌ：https://www.fesco.or.jp

社会貢献者の記録

2020年3月15日

発行者：公益財団法人　社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION